

## 〔研究ノート〕

# 2020年度スタディスキルⅡの授業報告

## Study Skills Ⅱ (2020)

中村学園大学 流通科学部

音 成 陽 子・浅 岡 由 美・坂 本 健 成・高 橋 絵梨花  
土 井 貴 之・西 島 博 樹・福 沢 健・持 松 志 帆

### I. はじめに

文部科学省中央教育審議会（2018）は「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」を示した。人生100年時代においては、教育、雇用、退職後という伝統的な3ステージの人生モデルから、マルチステージのモデルに変わっていく予測もある。高等教育の目指す姿にある人材像は普遍的な知識・理解と汎用的技能を文理横断的に身に付けていくこと、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、論理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材としている。さらに、学修者本位の教育への転換として、個々の教員の教育手法や研究を中心にシステムを構築する教育からの脱却、学修者が生涯学び続けられるための多様で柔軟な仕組みと流動性をあげている。

経済産業省は個人と企業・組織・社会との関わりのなかで、ライフステージの各段階で活躍し続けるために求められる力を「人生100年時

代の社会人基礎力」と定義した。この社会人基礎力は3つの能力・12の能力要素・3つの視点から構成されている。能力を発揮するにあたっては自己を認識して振り返りながら、目的、学び、統合のバランスを図ることが、自らキャリアを切りひらいていく上で必要と述べている。

そして、2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大によって、大学での学びが著しく変化した。学生は大学への入構が制限され、対面授業、WEB授業（リアルタイム型授業、オンデマンド型授業）、ハイブリット授業（ブレンド型授業、ハイフレックス型授業）など様々な形態で授業が実施された。

中村学園大学流通科学部の初年次教育においても、状況に対応するために授業内容、授業方法を考え直すことが必要であった。本稿は2020年度のスタディスキルⅡの授業について報告するものである。

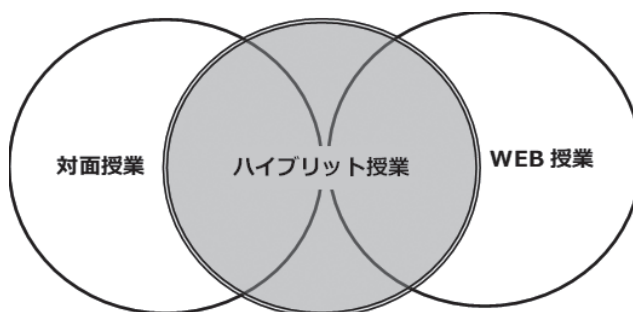


図1. 授業形態

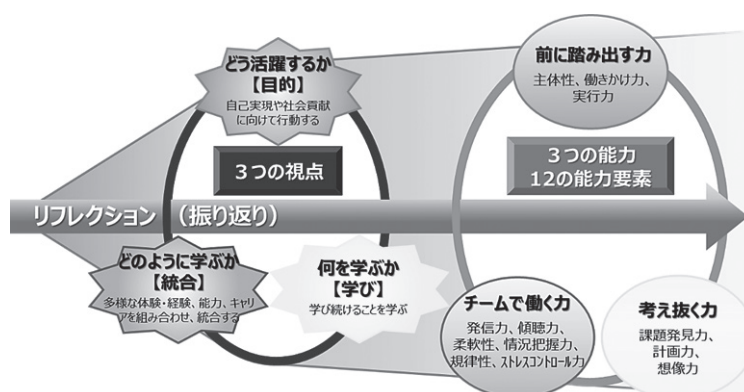


図2. 人生100年時代の社会人基礎力（経済産業省「社会人基礎力」より）

## Ⅱ. 本科目の概要

### 1. 位置づけ

流通科学部での学修に必要な基本的能力、特に、Academic Literacy を身につける科目として位置づけられる。1年次後学期の必修の演習科目（1単位）である。

### 2. テーマ

流通に関わる課題について、チームで情報を取集・分析し、それらを論理的に考え、問題解決できる基礎的能力の向上を目的とする。

### 3. 到達目標

- 1) 実社会に関心・問題意識を持ち、題を発見できる
- 2) 個人やグループでの調査や分析、考察によって、課題解決することができる
- 3) 自分の意見を持ち、論理的で説得力のある発表ができる
- 4) 大学での学修に必要な知識・技能を身につけ、活用できる

## Ⅲ. 授業展開

15回の授業展開を表1に示す。

表1. 授業展開

回	内 容
1	ガイダンス、チーム・グループ・作業グループの確認、Teams の各種機能を確認
2	課題1「Forms を作成する」Teams で Web 会議を主催する（含：画面共有）
3	Forms の作成とアップロード
4	Forms の作成と投稿
5	Forms に回答し、集計する
6	発表 PPT 作成
7	集計結果の発表
8	課題2「コロナ禍での日常生活の変化（前後の比較と今後）」 教員が担当するクラスを変更
9	前後の比較と今後の考えを PPT に作成・提出 授業についての調査

10	課題3「世の中の変化とコンビニの商品戦略—PB商品・限定商品・コラボ商品—」 解題「コンビニエンスストアの革新性（コンビニの業界研究）」
11	アドバイス講義1「有価証券報告書や統合報告書などを用いて」 （IR情報とSDGs）
12	アドバイス講義2「主なコンビニ業界関連団体の資料を参照する」 （書籍・記事・文献・統計データ）
13	アドバイス講義3「レポートの書き方」
14	レポートの作成と提出
15	授業のまとめ、1年次のまとめ

#### IV. 授業の実施方法

##### 1. Microsoft Teams の活用

本授業は256名の学生が受講、8名の教員と3名の助手が担当した。UNIPAは助手がクラスプロフィールを使用できないこと、学生同士・学生と教員の交流や情報共有をスムーズにすることを考えてMicrosoft Teamsにチームを設置した。チームには学生用（8クラス分）と教員専用のチャンネルを置いた。参加を容易にするため、チームと各チャンネルのメンバーは教員が事前に登録した。教員には、Microsoft Teamsの全ての権限を持つ所有者の役割を付した。所有者はメンバーの追加・削除ができ、不適切な投稿があった場合に削除ができるためである。助手は学生と同じくメンバーとした。しかし、授業を振り返ってみて、助手にも所有者の役割を付してもよかったのではないかと考

える。加えて、全ての教員にMicrosoft Teamsの機能活用のための説明会やプレ授業・模擬授業を行う必要があったかもしれない。

さらに、一斉授業はコロナ禍に対応するため、Microsoft TeamsのWeb会議を活用することにした。1回目・2回目は教員と学生の全員がWeb会議に参加していたが、教室での実施にもかかわらず通信環境が安定しなかった。そこで、教員のみがWeb会議に参加し、学生の参加はクラス担当教員のPCを教室のスクリーンに映し、それを視聴する方法で一斉授業とした。以後、教員は一斉授業がない場合も、Web会議をしながら授業を行った。

なお、教員の連絡には、Microsoft Teamsだけでなく、サイボウズGaroonのメッセージ機能も使用した。



図3. 一斉授業

## 2. 授業内容

シラバスは、昨年度とほぼ同様の内容（商店街を対象としたPBL）では、学生は学外で自由に調査やインタビューを行うことができた。しかし、コロナ禍で変更を余儀なくされた今年度は一昨年度までの課題であった業界研究に加えて、Society5.0と「新しい日常」について考えさせる内容とした。

授業を実施していくなかで、内容や課題を十分に検討する余裕がなかったこと、教員の授業に対する共通理解が不足していることが懸念された。そこで、急遽、授業中に学生アンケートを実施した。授業途中ではあったが、グループワークによる仲間づくりや、学生に身につけさせたい技能は、十分に成果をあげられなかったことがわかる。次の項に詳細を示す。

## 3. 中間アンケートの結果

対象：スタディスキルⅡの受講生228/256名  
(回答率：89.1%)

実施：2020年9回目の授業中の実施（一部、11回目に実施）

方法：Microsoft Formsを使用

## V. 学生の活動

### 1) グループ構成

授業展開は、学生グループワークを中心に実施した。クラスは8クラスあり、一人の教員と6グループ（1グループあたり5～6人）で構成した。グループメンバーは、学籍番号で自動的に決められたが、男女比は考慮した。

### 2) グループワーク

グループワークの成果物はMicrosoft Teamsの各チャンネルにアップロードした。そうすることで、1つのファイルをグループで共同作業しつつ、完成までをクラスの学生と教員で共有することができた。ただし、教員は全てのチャンネルにアクセスできるため、他クラスの状況を参

考にすることもできた。グループによっては、自分たちでチームを作成しての作業もみられた。この場合は、教員は作業経過を確認することはできなかったが、学生の自主性に任せることとした。

なお、個人で取り組む課題（レポート作成）については、UNIPAのクラスプロファイルを利用した。期限を設定できることと、個々の学生にフィードバックが可能だからである。

## VI. 教員の役割

教員は、出席を確認、グループワークを支援、学生を評価・フォローアップする役割を担った。なお、教員が担当するクラスは、1～7回目と8～15回で変更した。

授業は開始から10分間は出席確認や連絡事項、その後、一斉講義を行い、学生は課題に取り組んだ。アドバイス講義は、3名が各自の専門分野の視点から課題について約20分間の一斉講義を行った。評価は各課題に設定したルーブリックを用い、Microsoft Teamsの教員専用チャンネルにExcelファイルを置いて管理した。

## VII. 授業後の学生の感想

学生はグループワークのメリット、デメリットを経験しながらも、楽しみながら活動できたと推察される。目標到達度の自己認識は「ややそう思う（87%）」「とてもそう思う（29%）」の順に高い割合だった。課題の難易度は「適切（68%）」「やや難しかった（14%）」「やや易しかった（14%）」が高い割合であった。授業内容の意義や必要性の説明の理解・認識は「ややそう思う（47%）」「とてもそう思う（35%）」の順に高い割合を占めた。本授業に対する学生の評価は、「良い（42%）」「非常に良い（29%）」「普通（24%）」を合わせて95%となり、学生にとって有意義だったといえる。しかしながら、目標に到達できていない、課題にうまく取り組めていない、授業の意義を理解できていない、授業全

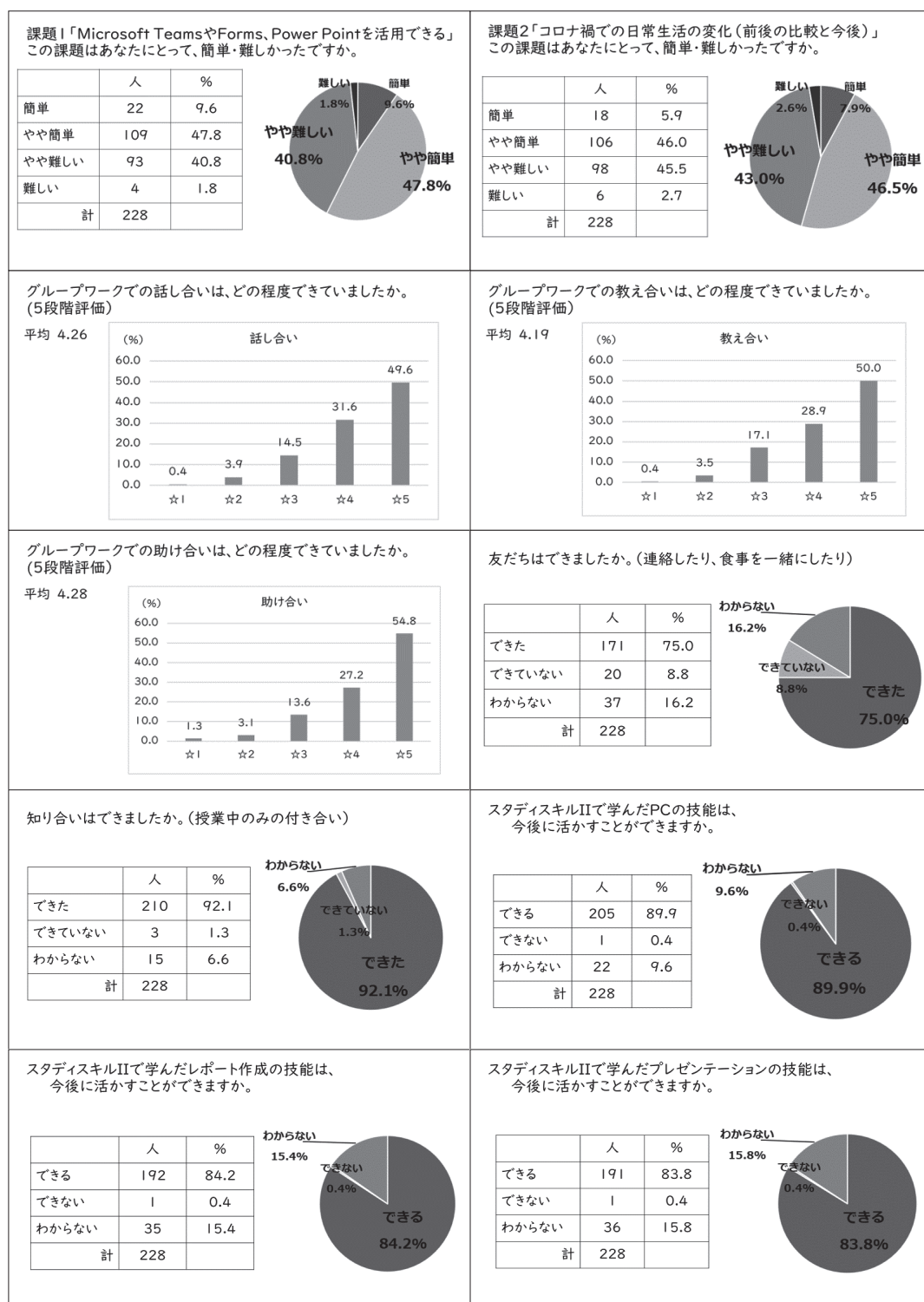


図4. アンケートの結果

体の評価を低くみている学生がいることは否めない。今後も、改善していく必要がある。

以下に、授業についてのアンケートから自由記述を学生の記述を抜粋する。

#### <改善点>

- ・クラスで補足があったり、なかったりしていた
- ・他のクラスの先生の講義を受けるときに、クラスの Web 会議が上手く作動せず、聞きとりにくかった
- ・授業ですることの説明をもう少し細かく説明してほしい
- ・チームでの発表やペア活動をしたかった
- ・他の班との交流をもう少し増やしてほしい

#### <良かったこと>

- ・他の生徒と交流することができてよかった
- ・授業の初めに、今日は何をやらなければいけないのかを丁寧に説明してくれたところ
- ・スライドなどを使って説明がされていてわかりやすかった
- ・課題のやり方の説明が丁寧に分かりやすかった
- ・大学に必要なスキルを身につけることができたので良かった
- ・グループワークなども活用していてとても良かった
- ・パソコンの使い方の知識を増やすことができた
- ・グループ活動で仲が深まったのでよかった
- ・流通について前よりも知ることができた
- ・パワーポイント作成や、レポートの書き方を手厚く教えてくれた
- ・プリントを配布されたのがよかった
- ・ICT をこれからも活用した授業であってほしい
- ・レポートの書き方は例を使って説明があったので、課題に取り組みやすかった

- ・論文の書き方を意識しながらレポートを書くことができたのが良かった

## VIII. 今後の課題

2020年度のスタディスキルⅡについて、次のような課題が挙げられる。

### ①スタディスキルⅠとの関連

初年次教育の科目という点から、スタディスキルⅠを受けてのスタディスキルⅡであることを認識しておく必要がある。学生が取り組む課題の関連性、レポートの作成・評価は一貫しておくことが望ましいだろう。

### ②教員の共通理解

事前打ち合わせ、グループメール、Microsoft Teams などの様々な方法を準備していたが十分でなかった。授業開始後に打ち合わせを実施すること、授業内容が変化あるいは複雑化する時点での打合せを行うことが望ましいといえる。あわせて、教員に時間的な余裕があることも重要である。

### ③学生が論文を読む、データ分析を熟考するなどアカデミックな面の強調方法

コロナ禍ということもあり、業界や企業の HP や記事の利用が多くみられた。書籍や論文を読み込むことは十分にできたとはいえない。今後、レポート作成の際には、書籍や論文を参照することを必須とするようにする必要があると考えられる。

### ④アドバイス講義を2年次以上の専門科目につなげる

取り組む課題やアドバイス講義は上位学年での学びにつながっていることを示す必要がある。このことは、スタディスキルⅡを学ぶ意義を理解することになるからである。

また、2020年度はグループワークの様々な手法（ジグソー、ピア・レスポンス、ピア・エディティングなど）を実施できなかった。高度なアクティブ・ラーニングに取り組むための導入教育であることも認識する必要があ



る。

#### ⑤担当教員が毎年変わることへの対応

授業内容や授業方法は、修正を重ねながらある程度のマニュアルが確定するように努める必要がある。コロナ禍や大規模災害などで課題を変更しても、初年次教育として学ぶべき内容は何かを共通理解しておきたい。そのために、授業報告を作成し、次年度に引き継いでいる。したがって、担当教員には前年度の報告書をご一読いただければ幸いである。スタディスキルⅡは初年次教育から専門教育への橋渡しとなる科目である。さらに、流通科学部の全教員が順番に担当する科目でもある。学生にも、教員にもやりがいのある科目となることが望まれる。

### IX. 謝辞

本科目の設定にあたり、ご尽力いただいた中村学園大学流通科学部の教員の皆様、中村学園大学の事務局に感謝申し上げます。そして、本科目を受講し、一緒に授業をつくり上げ、授業についてのアンケートに回答していただいた学生の皆さんにも心より感謝いたします。

### X. 注釈

- 注1) ハイブリット授業とは、対面授業とWEB授業を組み合わせた授業形態のことである。本稿ではブレンド型授業やハイフレックス型授業の総称とした。
- 注2) ブレンド型授業とは、ミックス型授業ともいう。演習や実習は対面授業、講義はWEB授業と組み合わせて実施する授業形態のことをいう。
- 注3) ハイフレックス型授業は教室での授業を中継し、対面でもオンラインでも受講できる授業形態のことである。
- 注4) ジグソーとはある内容を教えられるまで完

全に習得する責任感を育成し、それぞれの学生が注目される、あるいは、リーダーとなる機会を与える学習方法である。

- 注5) ピア・レスポンスとは学習者が自分達の書いた作文をお互いに読み合い、よりよい作文にすることを目標に話し合い活動をするというものである。ここで重要な点は、この活動がグループ内で協力的なかたちで行われるという点である。
- 注6) ピア・エディティング：学生が相互に小論文やレポートなどを批判的に読み、コメントを交換する方法である。文章に対して分析的評価能力を身に付けることができる。

### XI. 文献（記載順）

- 文部科学省中央教育審議会（2018）、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」、[https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt\\_koutou01-100006282\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf)（2021.01.28参照）
- 経済産業省、「社会人基礎力」、<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>（2021.01.21参照）
- 【注1、注2、注3】  
江口悦弘（2020）、「コロナ禍で変容を迫られる大学と教員 大学の授業はオンラインと対面のベストブレンドへ」、日経BP『教育とICT Online』、2020.11.23掲載 <https://project.nikkeibp.co.jp/pc/atcl/19/06/21/00003/112000149/?P=2>（2021.01.29参照）
- 【注4】  
E.F.Barkley, K.P.Cross, C.H.Major（著）、安永悟（監訳）、「協同学習の技法 大学教育の手引き」、ナカニシヤ出版、128-133、2015年
- 【注5】  
池田玲子（1998）、「ピア・レスポンスによる作文推敲」、日本語教育方法研究会誌 5（1）、18-19.
- 【注6】  
E.F.Barkley, K.P.Cross, C.H.Major（著）、安永悟（監訳）、「協同学習の技法 大学教育の手引き」、ナカニシヤ出版、201-204、2015年